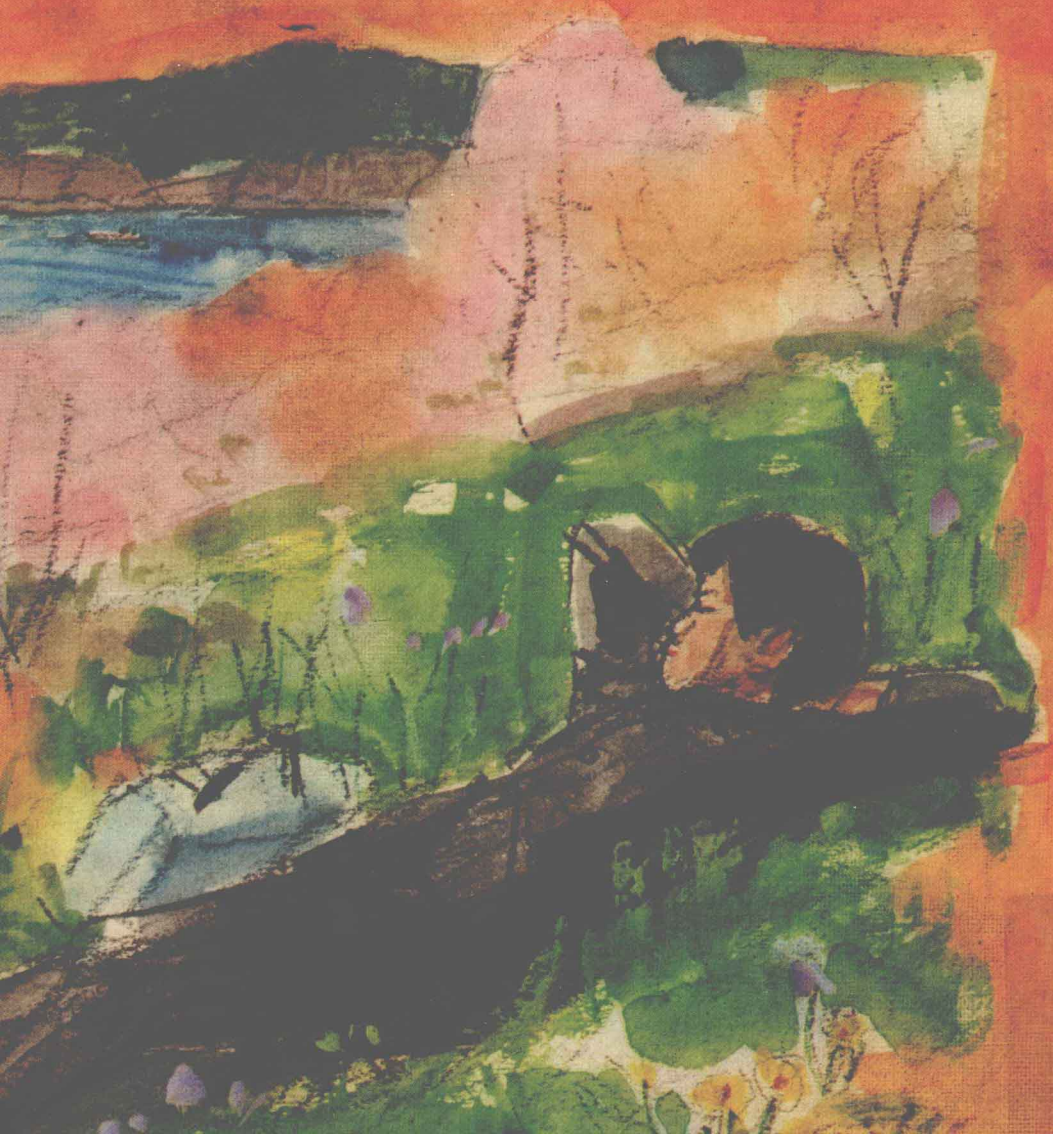


甲子園の土

藤田圭雄

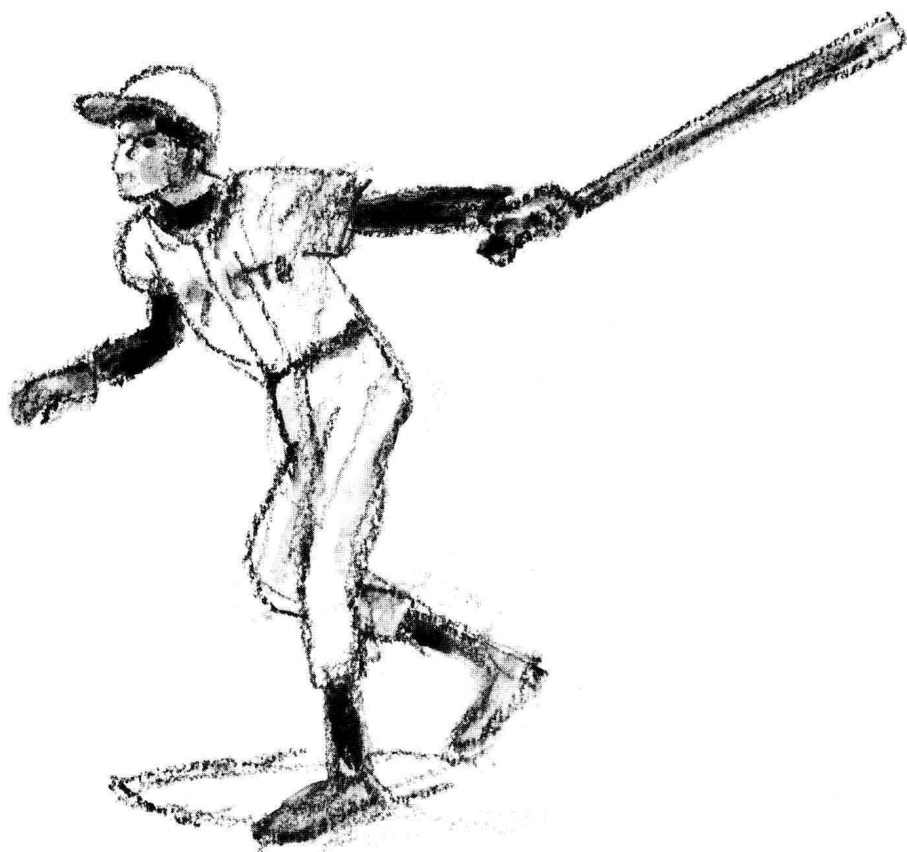
絵 井口文秀



甲子園の土

藤田圭雄

絵 井口文秀



913

藤田圭雄

甲子園の土

講談社 1976

166 p. 22cm (児童文学創作シリーズ)

ふじたまお

甲子園の土

昭和51年4月8日 第1刷発行

作 者 藤田圭雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号 112

電話 東京(03)945-1111 (大代表)

振替 東京3930

製 版 株式会社 まゆら美研

印刷所 豊国オフセット株式会社

双美印刷株式会社

製本所 島田製本株式会社

© 藤田圭雄 1976 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

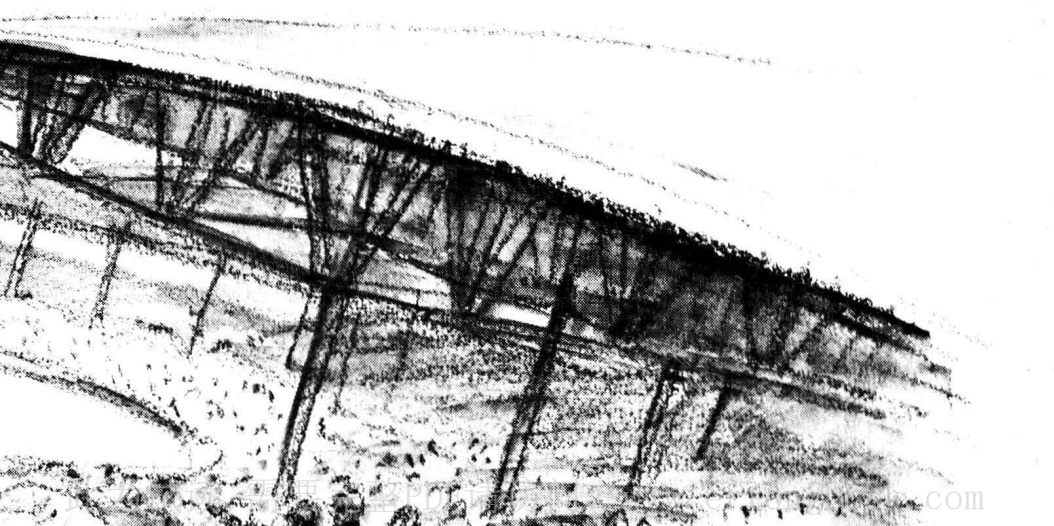
定価は箱に表示してあります。(児一)

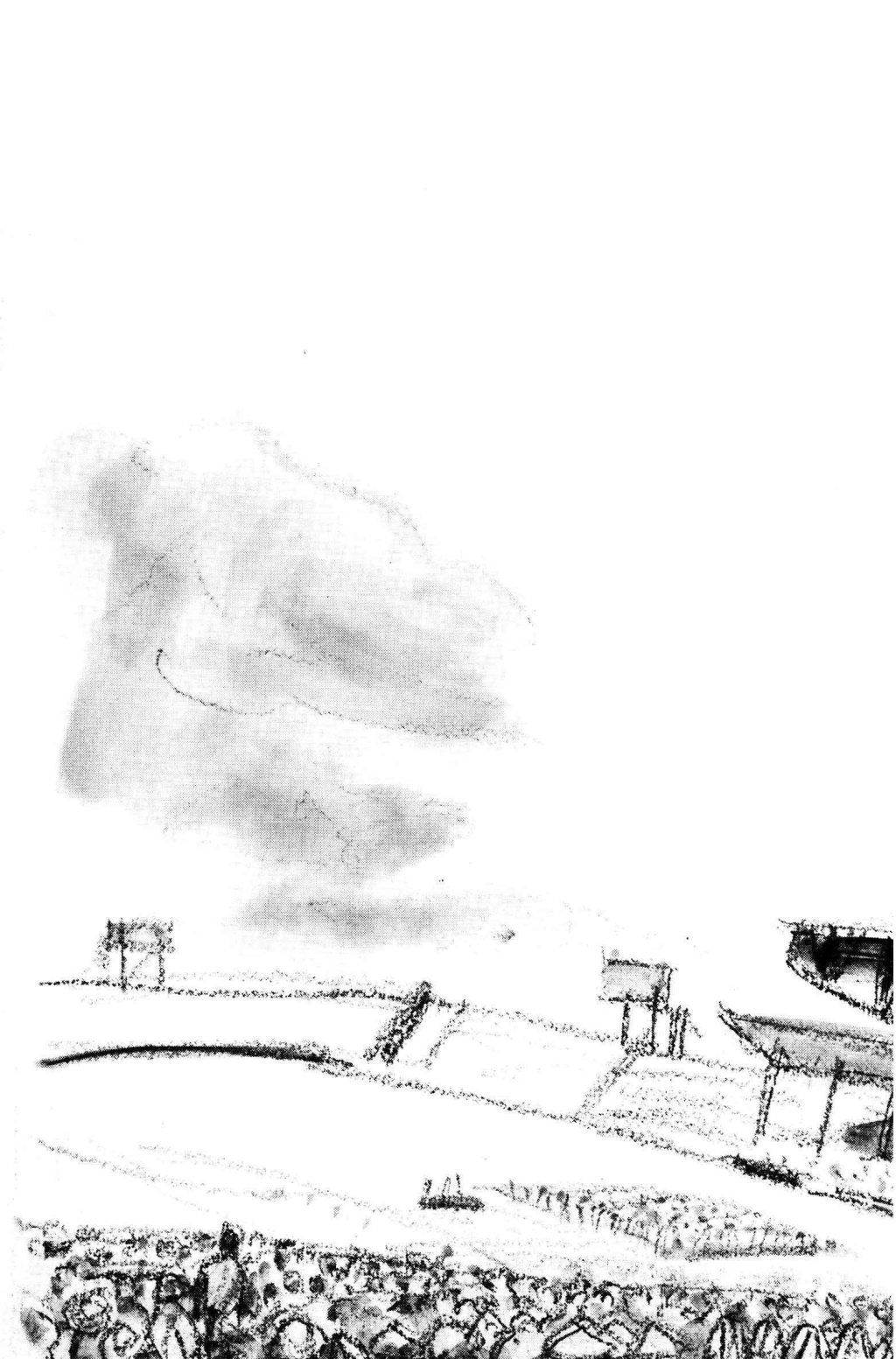
も

く

じ

甲子園の土……………	7
選手ってなんだろう……………	29
馬券……………	61
そろばん大会……………	95
死ということ……………	125
解説……………	162
阿川弘之……………	





甲子園こうしえんの土

甲子園の土



試合は、高校選抜野球の準決勝が終わったところだった。

テレビの画面には、勝ったN高の校旗がひるがえり、校歌が、こうふんするグラウンドをゆすぶるように波うっていた。一列にならぶN高ナインの顔がつきつきにうつる。みんな、首をもたげて、バックスタンドにひらめく校旗を見つめている。

八郎は、うれしいうな、そしてまた、ちよっぴりくやしいうな気持ちでその校歌をきいていた。

N高は、八郎がかよっているA商と同じ、I県の野球名門校だった。N高とA商は、いつも、県大会で優勝をあらそった。勝ったり負けたりだった。どちらが強いともいえなかった。

八郎は、A商のキャッチャーで、キャプテンだ。去年は、県大会でもN高に負けている。それで、この地方の代表としてN高がえらばれて、晴れの春の甲子園でかつやくしている。

校歌は終わり近くになった。

八郎は、ふと、自分たちが勝利の歌をきいているような気分になった。N高の校歌も、A商の校歌もよくにっていた。どちらも土地の名山をうたい、美しい川の流れをよみこんでいた。N高は平野のまん中なので緑がテーマであり、A商は海岸の町なので太平洋の荒波が中心になっているくらいがちがいで、あとはだいたい、意味のよくわからない、むずかしいもんくが、最後の学校名のくりかえしにつながっていた。とちゅうだけをきくと、どちらの学校の歌かわからなかった。

八郎は、もちろん、N高をおうえんしていた。この地方の代表に勝ってもらいたかった。しかし、できれば自分たちが出たかった。いつも相手にして戦っているだけに、こうして試合が終わってみると、うれしそうに校歌を合唱しているN高ナインがねたましかった。

そのとき、八郎とならんで、ねころがってテレビを見ていたオッチちゃんが、むくむくとおきあがった。

オッチちゃんは、八郎の父の友人で、もう一年近く、八郎の家にいそろうをしている。

関西の人なので、八郎たちはオツちゃんとよんでいる。正式の名まえはなんというのか八郎もしらない。

「あれなんや？ あの子ら、なにしてるんや？」

テレビの画面には、負けたM高のナインが二、三人、小さなふくろを出して、グラウンドの土を、せっせとすくいこんでいるすがたがうつしだされていた。

「試合に出た記念に、甲子園の土を持ってかえるんだよ。」

八郎はそう説明しながら、一昨年、夏の大会で、三回戦まで進んで負けたとき、なみだを流しながら両手ですくった甲子園の土の手ざわりを思いだしていた。

「土なんか持ってたえってなににするんや？」

試合のあいだは、半分ねむっていたオツちゃんだが、いまはしんけんな顔をして画面を見つめている。

「なについていうこともないけれど、甲子園に出場したということはたいへんな名誉だろ。だからその記念にあの土を持ってかえるのさ。」

「おまじないやな。」

「まあ、そんなものさ。」

……健闘、おしくもやぶれたM高ナインは、戦いつかれた両手に甲子園の土をすくい、またの日をちかって、しずかにグラウンドを去っていきます……。

アナウンサーのうわずった声に送られて、M高ナインは、ダイヤモンドに一礼して、つぎつぎに画面から消えていった。

八郎は、あすの決勝戦で、強豪O商と戦うN高ナインのことを思った。県下でのあらそいのことなどはもう問題ではなかった。ただ、勝ってくれ勝ってくれといのる気持ちでいっぱいだった。

「そうや、これや。」

とつぜん、オッチャンが大きな声を出した。八郎がびっくりしてふりむくと、オッチャんは元気よく立ちあがり、そそくさとへやを出ていった。

前の日にふとすがたを消して、その晩は帰ってこなかったオッチャンが、翌日の夜おそく、八郎がもうねようとしている時分に、ひよつこりと帰ってきた。

「オツちゃん、どこへいったの？」

八郎やうろうが立っていくと、

「ああ、しんど。重おもうて重おもうて。」

そういうながらオツちゃんは、大きなリュックサックを、ドシンと音をたててたたみの上におろした。

「オツちゃん、それなんや？」

おとうさんも、オツちゃんと話すときは関西弁かんさいべんになる。

オツちゃんはにこにこわらいながら、リュックサックのひもといた。そして、

「ちよいと待ちや。」

といって、たたみの上に新聞紙をしくと、リュックサックの中身なかみを、両手りょうてですくうようにして、その上にすこし出してみせた。

それは、すこし赤みをおびた土だった。

「これ、なんや。土やないか？」

おとうさんが、あきれたような顔をしてきいた。



「そうや、土や。」

オツちゃんはとくいそうな顔をしている。

「そんなもん、なにすんのや？」

おとうさんがいうと、オツちゃんはますます上きげんで、

「よう見てみい。土は土でも、そんじよそこらにある土とは土がちがいますんや。」
と、にやにやわらっている。

「そうかて、なんもちごうてるとこないやないか？」

おとうさんは、ちよつとその土をつまんでみた。

「ええか、この土はな、甲子園こうしえんの土やで。」

オツちゃんはとくいそうにいった。

「えつ、甲子園こうしえんの土？」

八郎はちろうはびつくりしてその土をつかんだ。

「おつとつとつと。あんまりきつう、いらわんといて。」

オツちゃんをあわてて手をのばした。